

なし、さらばかくわかちいふまじきにやとおもはる、

〔空穂物語〕菊の宴すきばこよつにはしつきすへてもみちおりしきてまつのこくだ物もりて、く

さびらなどして、おばないろのこはいひなどまいるほどに、略下

〔飯粥考〕空穂物語菊の宴に、すきばこ四に、つらはしの誤歟坏すゑてもみち折しきて、松のこくだもの

もりて、草びらなどして、をばな色のこはいひなどまゐるほどに、雁なきてわたる云々、按に海

入藻芥卷中に、八月朔日の小花粥に、薄を黒焼にしている、よしあれど、いかゞあらん、こは白色

を尾花にたとへしものと見ゆ、略中 白強飯といふべきを、尾花強飯といへるは、白鶴、白馬を葦

花の白きになすらへて、あしたづ、あしげのこまなどいふ類也、

〔類聚名義抄〕八饗 饗今正音脩饗 饗カタクカシキノイヒ 饗終紛二音カタシキノイヒ

〔倭名類聚抄〕十六饗餅 饗餅 四聲字苑云、饗餅加修紛二音漢語抄云、木乃以比、半熟飯也、

〔箋注倭名類聚抄〕四餅 加太加之岐乃以比、片炊飯之義、謂未全熟也、略中 玉篇云、饗餅也、饗同上、又

云、饗半熟飯也、二字不連文、廣雅亦云、饗謂之饗、此所引或誤、按說文饗、澹飯也、又載饗云、或从賁、則

知饗饗皆俗澹字、又按毛詩澠酌篇釋文引字書云、饗一蒸米也、正義云、蒸米謂之饗、饗必饗而熟之、

說文云、饗飯氣流也、則知饗謂蒸米不饗熟、故或云一蒸米、或云半熟飯也、釋名饗分也、衆粒各自分

也、畢沅曰、米纔一蒸、則未黏合、故曰衆粒各自分、

〔伊呂波字類抄〕加食 饗 饗カタクカシキノイヒ、半熟飯

〔段注說文解字〕五下 饗 脩飯也、脩各本依澹沃也、飯者人所食也、饗爾雅音義引正、脩倉頡作饗、脩之言澹也、水部

曰、饗、均之曰、饗、郭申之云、今呼饗音脩、饗飯爲饗、入均、孰爲饗、詩釋文引字書云、饗一蒸米也、劉熙云

饗分也、衆粒各自分也、按大雅澠酌行潦挹彼注、茲可以鈔、饗、箋云、酌、取行饗、投、大器之中、又挹之、注

之、於此小器、而可以沃酒食之、饗者、以有忠信之德、齊、從、倉、聲、部、與、三、部、合、音、也、府、文、切、五